



## 「インドネシア考」 のための覚書き

中 川 敏\*

ジャカルタ到着以来、同じ国にいるとはいえ、私のフィールドの東インドネシアはあまりに遠く、この町では特に面白い人類学的対象にもめぐりあえず、文献収集と論文書きにのみ集中してきたのだが、このところちょっと状況が変わってきた。

私がジャカルタに来たころから、1987年4月の総選挙を控えて、新聞などは、確かに、「政治の季節」の色あいを帯びてはいたのだが、私の耳にする範囲での日常会話では、特に政治は特権的な地位に立ってはいなかった。しかし、9月のルピア引下げ、10月の二大新聞のうちの一つの発行禁止（ではなく、発行許可のとりあげ）をきっかけに、政治が日常会話のかなりの部分を占めるようになった。

もちろん、この2種類のテキスト（新聞によって固定される政府見解などのテキストと、人類学者によって固定される日常会話のテキスト）は、そのまま直結されるという意味での説明連鎖（「なぜAなのか」、「なぜならばBであるから」という連鎖が意味をなす時、AとBを説明連鎖と呼び、そこに暗黙に前提とされているAとBを含むより大きな連鎖を「言語ゲーム」と呼ぶ）をなしてはいない。前者のテキストに頻出する語は「指導」、「建国5原則」あるいは「民主主義」といった語であり、後者のそれは「庶民（オラン・クテル「小さい人」）」あるいは「貧乏人」、「金持ち」といった語であり、両者のキーワードは互いに排他的である（政府見解に「貧乏人」といったタームが使用されることはなく、また日常会話に「民主主義」といった語が使われることもない）。しかし、ともに「説明し得ない物」として、「国家」（「国家」一般ではなく「インドネシア」）の概念をもっているという点で両者は一致している（いい換えれば、2種のテキストとも「物の世界」ではなく、「社会、制度の世界」を記述し、

\* Satoshi Nakagawa, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

その制度の根本に対しては同意をもっている）。

同じ構成的定義／規則をもちながら、みかけ上独立の言語ゲームを形成している、この2種のテキストの生成の歴史、および（でき得れば）その変換の式を求めることは、それだけでも人類学的政治学（あるいは「民族政治学エスノポリティクスの研究」）にとって興味深い問題を提供する。

「機能」的にいって、この二つのテキストのかけ橋をする第3種のテキストも利用可能である。便宜的に「評論家」（ないし「政治学者」）によるテキストと呼ぼう。具体的には、新聞の一記事として、某大学政治学教授某氏談としてのものが、一般的な例である。もちろん、それが外国の学者の説であってもかまわないのだが、フィードバックという点から国内の「評論家によるテキスト」に限っても問題がない。確立された（と内部の人間によって信じられている）社会科学の言語ゲームほど透明な（学び易い、陳腐な）言語ゲームも稀であろう（同じほど透明なものとしては、言論統制の下で発行されるテキストがあげられよう）。そしてその透明さ故に、他の場に容易に侵入し得る（マルクス主義、構造主義、エスノメソドロジー、何にせよ一度ゲームの規則をマスターすれば、そのゲームをプレイすることは容易である）。かくして、第1種（例えば「政府見解」）のテキストは、評論家によって「解釈」され、第2種（「日常会話」）へと引き渡される（例えば、インドネシアの「ジャワ化」ジャワウェーションなどという言葉は、非常に簡単なゲームの規則しかもたず、すぐさま「日常会話」の常とう句になる）。

どうやらジャカルタにも興味深い人類学的資料がたくさんあるらしい、ということに気づいてきた今日このごろである。（1986年10月記）（京都大学東南アジア研究センター助手、1986年6月からジャカルタ連絡事務所駐在）